【 46 】

氏名	浅 野 純 生
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	乙 第 764 号
学位授与の日付	昭和51年6月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 （学位規則第5条第2項該当）
学位論文題目	**潜伏期を中心とした輸血後肝炎に関する研究** **第一編　肝機能検査と肝生検所見による検討** **第二編　輸血後肝炎の発症と血球凝集反応**
論文審査委員	教授 大藤　眞　　教授 小川勝士　　教授 木村郁郎

学位論文内容の要旨

肺結核患者として内科的治療を行った後，肺切除手術を受けた際，保存血の輸血を受けた患者54例（うち28例の肝生検を実施）について，輸血後経日的に肝機能検査を実施し，組織診断の裏付けの下に発病状態を検討した。

その結果，GPT 100 γ/ml (Karmen 単位として89）以上，GOT 60 γ/ml (Karmen 単位として83）以上，BSP（45分値）10%以上の成績を示す場合は，臨床的にも輸血後肝炎と確診しうる。しかし，軽症不全型は半数に見落される危険がある。またこの基準のいずれかを下げると誤診例を包含する恐れがある。GPT 100 γ/ml はスクリーニングテストとして優れているが見過ぎの危険があり，GOT 60 γ/mlはこれより高い基準で見落す可能性があった。BSP は見落し，見過ぎが多くなる。術後1週間以内は手術操作の影響のためか肝機能検査値は過大に上昇しやすいが，術後1カ月以内の一過性の上昇は感染にもとづく異常値が考慮された。

そこでこの点をより深く検討するため，同一対象例について，Paul–Bunnell 反応，寒冷凝集反応，ヒヨコ血球凝集反応，アカゲザル血球凝集反応を肝機能検査と同時に行った。その結果，主として潜伏期において，GPT，GOTの上昇の時期に一致して寒冷凝集反応が一過性の上昇を示した。発病後にもGPT，GOTと関連した上昇を示す症例が認められたが，潜伏期での最高力価より低かった。この上昇はウイルス血症との関連が推定され，第一編の推定をより確実なものにした。

論文審査の結果の要旨

本研究は潜伏期を中心とした輸血後肝炎を研究したものであるが，これまで十分確立されていなかった輸血後肝炎の発生過程について重要な知見をあげ得たものとして価値ある業績であると認める。

よって，本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。